

神戸大学産科婦人科 石巻赤十字病院派遣レポート

神戸大学産科婦人科 鈴木嘉穂
平久進也

<派遣前>

3/25(月) 日本産科婦人科学会東日本大震災対策本部による人的支援計画において、宮城県石巻赤十字病院への4月9～15日の派遣が神戸大学と決定した。

3/26(火) 教室内の協議により、派遣医師は自主的に先に志願し、自分で腰椎麻酔ができる鈴木嘉穂(平成14年卒)および平久進也(平成15年卒)に決定した。

3/27(水) 京都大学の松村先生、濱西先生が選ばれたルートに倣って、下記旅程を決定した。

往路:4/9(土) ANA 1471 便(臨時便) 8:25 大阪伊丹発 9:40 山形着

復路:4/15(土) JAL 2238 便 19:00 山形発 20:20 大阪伊丹着

また、4/2～4/9 担当の東京大学産婦人科派遣隊の中江助教に連絡を取って、携帯電話番号やメールアドレスなどを情報交換した。東京大学は先発隊、後発隊に分かれての派遣であったが、2人×2組=4人全員が女性医師であるところを知った。

4/5(火) 京都大学濱西先生より電話にてアドバイスを得た。一方、藤田保健衛生大学安江先生にも電話して今後の連絡方法を確認した。

4/7(木) 深夜に宮城県沖を震源とする最大震度6強の余震。

4/8(金) 中江先生より連絡あり。昨日の余震により、外来は再度緊急体制となった。電気、ガス、水などのライフラインもストップしたとのこと。そこで、水などの生活必需品も持参が必要と考え、急遽、午後からドラッグストアで飲料・食料品などの物資を追加購入した。

<4月9日(土):小雨ときどき曇り 出発>

往路:伊丹空港(飛行機) - 山形空港(直行バス) - JR 仙台駅 - 石巻赤十字病院

7:30 鈴木運転の車で大阪空港に到着。搭乗手続きを済ませます。手荷物以外の荷物は段ボール大小2個ずつ+かばん2個+キャリアー2個、トータル60kgであった。一人当たり20kgという制約を超えてしまっていたが、支援物資ということで問題なく預けることができた。山形行きANA1471便は満席、被災地や復興支援に行くと思われる人も数多くおられた。

9:50 定刻よりやや遅れて山形空港に到着。気温は7℃、やや肌寒い。近畿日本ツーリスト運行の“がんばれ東北!! 山形空港直行ライナー”に乗って仙台駅に向かった。バス2台が山形空港から仙台駅まで直行したが、座席は満席であった。道中の山間部には残雪があり、桜がほぼ満開の神戸とは全く違う光景であった。12時前に仙台駅東口に到着。仙台駅はほぼ全ての店舗が開いていたが、多くは営業時間が短縮されていた。また、道路のところどころ陥没していて、震災の傷跡が色濃く残っていた。

仙台駅からはタクシーで一路石巻に向かった。クリネックススタジアム脇を通過し三陸自動車道へ。三陸自動車道より東側は津波被害が甚大な地域で、途中の多賀城市近辺の被災地風景が内陸部と大きく異なっているのを目の当たりにして衝撃をおぼえた。自動車道もところどころに凹凸があり、制

限速度 50km/時の規制がしかれていた。また、災害支援の車や、自衛隊車両、札幌市救急車、多くの泥まみれの車を見かけた。道路復旧作業のため渋滞が発生しており、到着までに1時間以上かかった。

15:00 前に石巻赤十字病院に到着した。石巻赤十字病院は移転して間もないこともあり、一見して要塞のごとくしっかりした建物であった。この1ヶ月の間に、様々な地域から日赤チームが支援にきており、病院前には大きなテントが設営されていた。病棟にいくと、東京大学からの応援医師2人(中江先生、浦田先生)が待機しておられた。4月7日に大きな余震があったため、8日は2人とも院内に泊まったとのこと。引き継ぎノートの受け渡し、院内の取り決め、オーダーリングシステムの説明を受けた。非常にシンプルなシステムが構築されており、ストレスなく業務を行えるようになっていた。そこへ常勤の長谷川先生もこれ、互いに自己紹介をした。初対面ながら、快活で有能なお人柄が伺われた。

この時点での入院患者は15名。前期破水の初産婦1人と陣発の経産婦以外は全て産後の患者であった。緊急帝王切開は1stと常勤医で行うので、2ndは人手が足りない時のみ呼ばれる体制が引き継がれているとのこと。当直業務は当然ながら分娩と外来の対応であるが、産婦人科と確定していない救急患者については、まず日赤の応援医師が診察することになっていた。応援医師が1stと2ndの当直・待機をすることになっており、当日は鈴木が1stで平久が2ndとした。

東京大学の先生は23:40分発の夜行バスで帰京予定とのこと、ご好意により日直を継続して頂いて、我々はチェックインのため宿舎であるマイルーム石巻に向かった。マイルーム石巻とは、シングルアパートを改造した宿舎であった。我々の居室は202号室で1階に食堂があった。マイルーム石巻にチェックインし、毎朝食は持参できるようにお弁当にしてもらおう約束をとりつけた。この日だけは、夕食も弁当にもらい、二人ともいったん病院に戻り、東大のお二人の出発を見送った。その後、平久は宿舎へ。

当直業務を開始して間もなく、救急外来より相談あり。下腹痛を主訴に来院した40歳代女性。1ヶ月ほど前から下腿浮腫が認められていた。どうも妊娠らしいが、重症高血圧(210/100mmHg)もあり。すぐに病棟へあげるよう依頼したところ、その直後に1階のトイレで分娩になったとの連絡あり。児は直ちに日赤医師により蘇生されながらNICUへ入室。褥婦も遅れて病棟のLDRへ。ところが、高血圧の上に軟産道裂傷が大きいので、処置は手術室にて脊椎麻酔下で行うのが妥当と判断し、常勤の長谷川先生に来院いただいた。同時に分娩が進行していたため、2ndの平久も招集された。なお、手術に際しては、水が貴重なので手洗いはなし。速乾性擦りこみ式消毒薬を使用して滅菌手袋を装着し、術衣を着るという体制であった。手術は無事終了。分娩も問題なかった。

当直室は病棟の家族控え室が利用されており、簡易ベッド2台を使用しているため、意外にもくつろげるようになっている。食料品も我々が持参したものも含め大量に備えられており、しばらく不自由しないと思った。

<4月10日(日):快晴>

昨夜、手術終了後は朝まで何事もなく経過した。術後の患者も血圧管理や輸液療法は必要であったが、順調に経過していた。AM 8 時頃に来院した平久と日直を交代。鈴木は昨日の朝から移動と当直業務が続いたため、少し疲労感あり。昨夜の術後患者を診察してから宿舎にもどり、昼過ぎまで就寝。

平久は、9時半より産後の退院患者2人の診察。引き続いて帝王切開後2日目の患者2名の硬膜外カテ抜去。陣痛初来患者もおらず、病棟は落ち着いていた。14時に救急から妊娠20週妊婦の交通事故外傷後の診察を依頼された。診察・諸検査では全く異常がなかったため帰宅としたが、震災のため妊婦健診をしばらく受診していなかったようだ。当直帯も外来1件のみで、平穏であった。

鈴木は午後になり被災地の実景を伺うため外出した。宿舎のマイルーム石巻は、石巻赤十字病院から車で10～15分程度のところにあり、JR石巻駅に近い。駅前の商店街までいき、港を目指して歩く。当然のことながら、津波がおしよせてきた地域であり、商店街の道路脇にはヘドロがついた家財道具が累々と集積されていた。震災から1ヶ月たち、ある程度は運び出されているのであろうが、復興はまだまだ先の話といった印象である。港へ向かうとその印象はさらに強くなり、空気はかなり埃っぽく腐敗臭もあり、被災者の気力を奪わないかと心配になる。阪神・淡路大震災の被災地とは全く異質の状況だと感じた。ただ話に聞いていた以上に、東北人は強く、みな視線をあげて生活されているようである。ただただ敬意を払うばかりである。あまりの埃っぽさに咳き込むようになってきたので、ホテルへ戻り18時に食事を済ませたのち、当直のため病院へ出向き、平久と交代。

昨夜のこともあり、少し構えながら当直の時間帯へ。支援のため全力を尽くすつもりできているが、何も起きないのであればそれが一番であることもまた事実。被災地にこそ、安息は必要なのだ。

<4月11日(月):曇りのち雨>

夜間は1件分娩があったのみ。応援助産師の技量が高く、ストレスなく過ごせる当直であった。本日から外来開始となる。AM8時頃に、朝食の弁当を持参して平久が病院へ到着。宿舎の方が寒くて、やや睡眠不足の様子。病院にいる方が、余震の面からも安心できるため、どちらが休息できるのか判らない。

8:45 頃に常勤医の堀口先生と千坂先生、そして長谷川先生もそろい、改めて挨拶をした。週末の申し送りをしたのち、日勤業務の打ち合わせへ。外来担当は堀口先生とAM平久PM鈴木とし、病棟/処置がAM鈴木PM平久とした。外来患者数は、近隣の開業医が1件再開したらしく、一時期より減少している様子。それでも50～60人/日ぐらいか。ブースが2つであること、不慣れなオーダーリングであること、災害時用カルテが併用されていること、そしてもちろん来院患者が被災者であり把握に時間がかかることなどから、外来のペースはなかなかあがらない。カルテの中のコメントには、現在の居場所、家の状態、ライフラインの確保などの状況についての記載があり、それによると、家が流され避難

所暮らしや親戚の家で暮らしている人もおられ、身の引き締まる思いであった。

ところで、分娩数は急性期に比べると明らかに減少しており、原因を究明中である。もともと4月の予定分娩件数は少なかったそうであるが、あまりに急激な変化のため不安になる。千坂先生が、被災地の状況を把握しようと日夜努力されているが、情報が錯綜したり、そもそも情報が掴めなかったりと、全体像の掌握は困難をきわめている。しかし、その真摯な態度には頭がさがるばかりである。

午後からは特に分娩・手術はなかった。そして 14:46 に 3 月 11 日の地震発生後ちょうど 1 ヶ月ということで、院内放送のアナウンスにより全員で 1 分間の黙祷を捧げた。

夕方は、特にミーティングはなくそのまま当直時間帯へ。本日の当直は 1st が平久、2nd が鈴木。まず平久が食事とシャワーのため、宿舎へ。その後、PM7時過ぎくらいに来院し鈴木と交代。

17:20 に震度 4 の余震があり、以降も数回揺れた。しかし、余震のときも病棟スタッフは、慌てずにドアの確保、患者の見回りを素早く行っていた。石巻赤十字病院は免震システムが備わっているため、地震の際もユッサユッサ揺れるような感じで、建物のきしみなどは全くなく安心できた。我々も余震の小さいものにはもう驚きもしない。慣れたくないものにも、慣れていく。産婦人科医として、当直漬けの生活も然りである。

平久は、夕方、助産師から、大震災の時の体験を聞くことができた。ちょうどハンバーガー店の中にいて、すぐに飛び出したそうだ。道路はとても渋滞していて、車載テレビで大津波の情報を知り、すぐに脇道を通り北に向かい難を逃れたとのことだった。実際にその道路は津波で無惨な状況であったらしい。

<4月12日(火):快晴>

夜間は何もなくしっかりと平久は睡眠を取ることができた。さほど忙しくなかったことに、少し「肩すかし」な感覚になるが、平和なことに勝るものはない。いつ嵐がおとずれるかもしれないから。

一方の鈴木は朝食後、平久の弁当を持参して石巻赤十字病院へ向かおうとフロントにタクシーを頼むも、なかなかつかまらない。近いとはいえ車で 10 分以上かかる距離であり、もっと最寄りを希望するのは贅沢というものか。もちろん、京都大学の先生は東松島から通われたことを考えれば、現在の状況で満足すべきといえる。院内宿泊も、完全な当直室であればよいのであるが、これも高望みである。避難所の生活を考えれば、捨て去らなければならない邪心である。

朝 8 時半に軽いミーティングの後、鈴木は外来、平久は病棟に。朝の病棟診察は退院患者 3 名であった。13 時頃にあった経産婦の分娩は常勤医の長谷川先生が担当された。午後は我々の担当部署を交代。外来数は、やはり 50~60 人/日ペースである。しかし、午後の外来はポツポツ来るので、空き時間がある。合計 15 人程度であった。石巻の産科診療施設は限られているため、妊娠したということで来られる初診患者が毎日 5 人くらいはいる。

オーダーリングや災害時カルテの確認、ライフラインの確認や、泥で汚れた母子手帳を見たり、被災をうけた開業医の名前を聞くことも。ある程度、外来はスムーズに流れた印象である。しかしながら、地域により被災の度合いは大きく異なるため、妊婦への指導内容は、現生活状況によつての臨機応変さが求められ、特に失職や家の流失など家庭全体の不安を抱えている妊婦への対応に苦慮する。

病棟業務はやはり穏やかであった。しかし、常勤医師も応援医師も、まだ見ぬ妊婦、さまよえる妊婦がいるのではないかとそんな不安にかられるものである。

夕方には、日赤広報大使の藤原紀香さん、大黒摩季さんが来院された。産婦人科病棟にも来られスタッフや患者一同は色めき立ったが、被災地の厳しい生活の中では、彼女たちのねぎらいの気持ちがいい息抜きになったと思う。

その後、本日の1st 鈴木がマイルーム石巻へ。タクシー代は片道 1460 円から 1550 円くらいである。一日で2往復することを考えると、なかなか馬鹿にならない金額になる。そんな事を考えながら外をみると、ちらほらと営業を始めた飲食店があった。被災された方が、久しぶりに外食されたりしているのであろうか。少しでも安らいでほしいと願うばかりである。ホテルに着き、さっさとシャワーを浴びて、食事をしたのち再度病院へ。夕暮れから夜にかけては、明かりが少ないため、急速に暗くなる印象がある。路面は荒れており、信号機も幹線道路しかついていない。よって、タクシーの乗り心地はずこぶる悪い。

19:30 に鈴木と平久が交代。ところで、病院は免震構造であるため余震があると少し長く揺れが残る。ホテルでの体感とは異なる。いずれにせよ、余震が早く治まり、被災地に安息が戻ることを願うばかりである。

<4月13日(水):晴れ>

当直時間帯の分娩 1 件。やはり応援助産師の技量は高く、ストレスは感じない。正常分娩であれば、パスをだせば指示終了であり、非常に楽である。

AM8時過ぎに平久が来院し、8:30 頃から病棟で打ち合わせ。夜間の中に経産婦が入院しており、陣痛誘発することに。本日の外来担当は、堀口先生とAM 平久 PM 鈴木、病棟/処置はAM 鈴木 PM 平久である。本日は千坂先生が避難所の状況を把握するため、午後の間は不在となる。午後から予定の反復帝王切開は、午前中の中に患者が入院し、長谷川先生が担当した。助手は平久で、滞りなく終了。

外来は、やはり 50~60 人/日ペースくらい。病棟の処置は、退院診察が数件程度であった。いままで昼食はだいたいカップラーメンであったが、今になって病院食堂が11日から再開していることが判明した。込み合っていたものの、平久が問題なく利用できた。明日からは、2人とも食堂でとろうと決めた。手術後に誘発患者も分娩になり、長谷川先生が対応してくれた。

本日の当直は、1st 平久、2nd 鈴木である。本日で、支援期間の半分を越えたことになる。比較的穏やかに経過しているが、油断は禁物である。

<4月14日(木):晴れ>

早朝に分娩が1件。側臥位分娩であった。担当した助産師による分娩介助は、非常に落ち着いていて安心できた。会陰裂傷もほとんど無い。聞いてみると4年目の助産師で葛飾赤十字産院から来ているとのことであった。そこでは年間の分娩件数が2000件程度あるらしく、とても良くトレーニングされている印象をうけた。午前中、応援助産師による現地助産師に対するフリースタイル分娩の講義が催された。常勤医の千坂先生、長谷川先生とともに参加した平久は、このように助産師同士が横のつながりを広げ、お互いに勉強し合っって切磋琢磨することはとても素晴らしいことだと感じた。

一方、鈴木はフロントにタクシーを呼んでもらうが、相変わらずなかなかつかまらなかった。病院までの道は少し渋滞していたので、タクシー運転手の機転で脇道へ。民家から出された大量の畳の山を横目に、病院へ向かう。津波はかなり汚いものであるようで、家財一式が使い物にならないようである。結局、8時30分過ぎに病院到着。

午前9時前に病棟で打ち合わせ。本日も予定帝王切開が1件。本日は長谷川先生と鈴木で担当。本日はルーチンの手洗いを施行した。問題なく手術終了。長谷川先生の手際がよく、全く問題なく手術が終了した。

少し時間に余裕ができたため、堀口先生の計らいで、被災地の状況を視察に行く事になった。堀口先生の車で、津波の影響を強く受けた、石巻看護学校(旧石巻赤十字病院)あたりから、市場の周辺を視察した。堀口先生は、地震発生当日は14:40からその学校で講義をされていたとのこと。開始6分後に大地震。すぐに屋外に出られた。津波の怖さを知っている看護学校の教師が、直ちに全員を裏山に誘導した。堀口部長は津波がきても、そんなに大きくないだろうと、徒歩で内陸部の自宅へ移動したそうである。寒くて早歩きしたことで助かったとおっしゃっていた。強い人であると感じた。バイパスを通過して病院に帰ったが、大渋滞につかまり、到着は17時を越えていた。

ところで、病院地下には大量の支援物資が保管されており、それを見る度に、横のつながりの大切さを感じるものである。加えて、今回のように学会の働きかけがあれば、まさに鬼に金棒であろう。本日が1stである鈴木にとっては病院内で過ごす最後の夜である。初日を思えば、かなり穏やかな夜が続いており、少し不気味ではあるが、しばらく平和な夜であってほしいと願う。

<4月15日(金):晴れ>

当直時間帯の分娩2件。日赤の応援助産師は5日間交代であり、昨日までとは別施設からの方たちであったが、やはり、安心していただける分娩介助であった。

8時30分過ぎに平久が来院。9時前に打ち合わせ。外来患者数は、50~60人/日ペース。再開した開業医があること、自発的に他の地域へ移動した妊婦がいることで、今後、患者数は増加しないのであろうか。ただ、4軒あった開業医は1軒だけとなっており、そこで受け入れられる分娩数は限られているので、石巻赤十字病院が受け皿として果たす役割は依然大きいのは変わらないはずである。さらに病院が本来の機能を取り戻せば、婦人科患者や婦人科手術の対応もしなければならなくなる。これらをしっかり軌道に乗せるまでは、支援の継続が必要なのは言うまでもない。ここは、石巻最後の砦なのだから。

16時頃に病棟の千坂先生より、妊娠31週の妊娠高血圧症候群の妊婦に胎児心拍モニタリング異常があるために、これから緊急帝王切開を行うと連絡が入った。帝王切開は術者平久、助手堀口先生で行った。手術所見として、胎盤後血腫とCouvelaire徴候が認められ、常位胎盤早期剥離であった。児はRDSのため、挿管のうえ呼吸器管理を必要とした。

当直は1stが平久で、分娩が2件あった。1件目は胎児機能不全のため吸引分娩となった。子宮収

縮が悪く弛緩出血が認められたため、子宮収縮剤投与や子宮内への巻ガーゼ挿入による圧迫止血を要した。また2件目も子宮収縮が悪く、子宮収縮剤投与が必要であった。

<4月16日(土):最終日、晴れ>

鈴木はいつもより早く8時過ぎに到着。昨夜の2件目で分娩した患者が多量に出血したとコールがあった。すぐに診察すると、子宮頸管内に多量のコアグラが貯留しており、胎盤鉗子でコアグラを軽やかに引き出し巻ガーゼを挿入して、圧迫止血処置を行った。やはり、お産は気が抜けない。

藤田保健衛生大学からの派遣チームはPM3時頃の到着予定。一方、我々は山形空港PM7時出発なのでPM1時には病院を出発しなければならなかった。そこで、干坂先生が空白時間を埋めていただくことになった。

帰路は、タクシーで仙台駅まで行き。仙台で昼食。仙台駅から山形空港までの直行バスには乗車できず、山形駅までのバスに乗り換えた。タクシーにて山形駅から山形空港へ向かい、18時頃に到着した。山形空港では、DMATで支援に参加していた神戸大学附属病院のチームと出会った。彼らは仙台市内のホテルに宿泊しながら石巻の避難所で支援活動を行っていた。しかし、連日片道2時間かけての移動という過酷な状況であり、かなり疲労しておられたように感じた。被災地ですら、病院と避難所では大きく状況が異なり、避難所への対応が後回しにされてしまう危険性があるようである。

山形空港19時発の便から、18時30分発の臨時便へ乗り換えることが可能であったため、DMATのメンバーと同じ飛行機で伊丹空港へ。20時過ぎに伊丹空港へ到着し、余震が全くない生活に少しの違和感と大きな安堵感を感じながら家路についた。

まとめと感想

(鈴木)

今回の未曾有の震災が起きてから、全国から世界中から多くの支援があり、今も続いています。それらの多くが物資であったり義援金であったりするし、無事を祈る気持ちであったりします。ただただ心配でいることしかできない多くの人の代わりに、自分はより直接的に支援できる立場・職種にあつて、微力でも被災地の役にたてるということで、医師本来としての充実感を得ることができました。また医局の垣根を越えるどころか、全国的な横のつながりの活動に参加できたことで、被災者の皆様が本当に必要とし、われわれが目標としなければならない医療のあり方を知る事ができました。今回得られた多くの経験を持ち帰り、より多くの仲間達に伝えていきたいと思えます。

最後に、今回の支援の話がでたときに、手を挙げながらも参加できなかった同僚たち、身を案じながら送りだしてくれた教授をはじめとした医局員の皆に、心から感謝いたします。

沿岸部を中心とした東北地方の被災地の医療が、少しでも早くたちなおることを信じて、報告を終わります。

(平久)

われわれが石巻を訪れた時には、震災から約1ヶ月がたっており病院内、宿舎など、われわれが生活する範囲での不自由さやライフラインの心配はあまりなかった。しかし、今後また大きな余震の可

能性が警戒されており、派遣で赴く際には余震の影響を想定して十分な準備を行うことが必要であると思う。

初日の出来事には驚いたが、今回石巻赤十字病院で診療した分娩はハイリスク症例が少なかった。滞在した1週間で、帝王切開も含め14件の分娩があった。単純計算で750件/年のペースとなるが、これは京都大学チームの報告と比べると分娩数が半減している印象である。減った分の妊婦がどこに行っているのかという実態については全く把握できていない。われわれの派遣された時には、1件の開業医院が外来と分娩を開始しており、それも石巻日赤での分娩件数が減少した要因であると推測される。

派遣されたわれわれの仕事のメインは毎日の当直、外来、手術の手伝いである。今回の派遣が、大震災により心身ともに疲れきっている常勤の産婦人科の先生方の少しでもお役に立てたならば幸いである。一方で、外来や分娩を担当しながら、常勤医の先生との役割分担方法について考えた。今後、分娩件数やいろいろな状況が落ち着いたところで、もういちど派遣体制などの見直しが必要であると感じた。

大震災直後から、被災地に行って何かできることはないかといたまれな気持ちでいました。今回このような派遣があることを知り、真っ先に手を挙げました。われわれのような医師は、こういう時こそ社会貢献ができる仕事だと思います。

地震後1ヶ月が経過した時に行きましたが、これから先どのくらいで被災者が通常生活ができるのだろうか見当が付きませんでした。病院内はあまり不自由の無い生活が送れますが、避難所の人たちの辛さ、生活の不便さは想像ができません。たった1週間という短い期間でしたが、石巻赤十字病院のスタッフの皆様、全国から派遣されている日赤関係の方々にはいろいろ支えていただきました。心から感謝を申し上げます。

そして今回このような機会に、微力ながら社会貢献ができたことを幸せに思います。一生を通じても体験できないような機会を与えて下さった、日本産科婦人科学会、東北大学産婦人科医局、神戸大学の関係者の方々に心から感謝申し上げますまた、派遣の1週間病棟を切り盛りして下さいました医局員の皆様に心から感謝申し上げます

阪神淡路大震災で多大な被害を被った神戸の街も、今では何も無かったかのような街に変わっています。今回の大震災、津波はもっとひどい被害が出ています。それに加え、職を失ったりする2次的な被害も出ていると聞いています。これから先、復興には時間がかかるとは思いますが少しでも早く復興されるように心よりお祈り申し上げます。